

## 『文房具屋のまさ子』

—— 現代アートの現代ってなんなのかしら。

市役所の人が持ってきたチラシを眺めながら、まさ子は寂れた文房具屋の店先で、普段なら考えてもみないことを、ひとり思っていた。

—— 現代がつかないと、何が違うのかな。

今ではすっかり人通りのなくなった古い商店街の入り口に、まさ子の文房具屋はある。まさ子が子供の頃に、両親がこの店を始めた。文房具は単価が安いので、昔は「貧乏（びんぼう）具」と呼ばれたくらい、さほど儲からない商いだが、小学校と中学校のすぐ近くなのと、当時はまだ周辺に大きな商業施設もなかったおかげで、小さな商店街は地元の人々からは「銀座」と呼ばれていた。その銀座通りと県道が交差する角にあるこの店は、文具や菓子や細々とした日用品を買い求める客足で、小さな見かけの割には随分と繁盛していたものだ。

一人娘のまさ子は独身で、結婚は一度もしていない。若い頃には、勤め先の自動車部品メーカーで知り合った男性と交際した時期もあったが、養子にこだわる祖母が首を縦に振らなかった。やはり養子だった父は経師職人もしていたので、店のきりもりで忙しい母の代わりに、まさ子は祖母に育てられたようなものだから、その祖母の気持ちを見えなかった。やがて気がつけば世間の適齢期を過ぎてしまっていた。祖母は、自分が悪かったと、亡くなるまで悔やんで詫びていたが、数々の縁談にも何となく乗り気になれなかったし、縁遠かったのが祖母のせいだったとは思っていない。

まさ子が四十四歳の時に父が大病をし、母が父の介護のために店を閉めようかとも言いだしたが、勤めていた会社が不況の煽りで傾きかけたのを機に、早期退職して家業の文房具屋を継いだ。それからやがて十年になる。父は数年前に他界し、今は母と静かな二人暮らしだ。

店を継ぐ随分前から、町の南側の開発地区に大きなショッピングセンターが次々と建設され、ストローのように、この辺りの商店から客が吸い取られて行った。今では殆どの店が商売を辞めてしまって、ところどころ開いている店も大抵は地元のお年寄りが雑談をしているだけで、まともに商売をしている様子

はない。人口も増えて町は市になり、役場は市役所に看板を掛け替えたというのに、この辺りの街並みは、「市」と呼べるような見映えからはほとんど遠ざかっている。

皮肉なもので、まさ子の家の先祖代々の田んぼだった土地が、その商業開発地区の一角に面していたおかげで、数年前にできたスポーツジムに土地を貸すようになり、店が無くとも生活に困らないだけの地代が月々入ってくるようになっていた。五十代も半ばに差しかかり、後継ぎもない店など畳んでもいいとは思っているが、子供の頃からこの文房具屋でノートや鉛筆の匂いを嗅いで育ったので、まさ子には店が自分の部屋に居るように自然なのだ。古い品物も多いが腐りもしないので、儲からない代わりに損もしていない。商業地区へ走る店の前の県道は、車の通りだけは増え、他の商売に鞍替えすればやりようもあるだろうが、今からビジネスというものに手をだす理由もまた、まさ子には見出せなかった。

そんな寂れた町の古びた文房具屋に、市役所の文化担当という臨時職員の人 がチラシを持って訪ねて来たのは、「トリエンナーレ」とかいふ現代アートのお祭りに、この市も会場として加わることになり、寂れた商店街のショーウィンドウや空き店舗にも、芸術家の先生たちの作品を展示しようという計画が浮上したのだ。開発地区には鳴り物入りの北欧の家具店まで開業して益々発展の一途だというのに、芸術祭の企画の人によれば、時代に取り残されたような昭和の暗さが残る商店街跡の方が、シニールな趣きがあつて面白いんだそうだ。

—— 現代アートつて、なんだか偉そう。

現代アートがどんなものかは、最近やたらと、その、なんとかナーレのニュースを目にするので、雰囲気くらいは理解しているつもりだ。それに何といつても、まさ子の生まれ育ったこの町には有名な美術大学があつて、近所には昔から少なからず美大生が住んでいるのだ。芸術なんて解らないだろうと馬鹿にされちゃ困る。

子供の頃に店で見た大学生の多くが長髪で裾の広がった流行のGパンを履いていたが、美大生にはもっと独特な雰囲気があつた。中でも、ある日、店に入つて来た一組の男女は、もっと長い髪にスモックのような長い服を着て、長い数珠のような木製のビーズにヒゲモジヤの外国人の顔写真が付いている奇妙な

ペンダントを首からぶら下げていた。人目を気にせず笑いながらベタベタしているのに、目つきはナイフのように鋭くて、どことなく近寄り難い空気を子供だったまさ子は敏感に感知していた。しばらく後に、たまたま観ていたテレビ番組で、ビートルズのジョン・レノンの奥さんが、オノ・ヨーコという日本人の現代芸術家だということを知った。

——このヨーコさんて人、前に店に来た変なカップルの女の人に顔が似てるな。

と、ブラウン管に映し出されたベッドの上のジョンとヨーコの姿に、ドキドキしながら見入ってしまったのを今でも覚えていている。

——店に来てた、あの変な人たち、今ごろどうしてるのかな。あの人らも、あんどき、現代美術つてのをやってたのかしら。

しばらくして市の人が、まさ子の店のショーウィンドウに飾りたいという絵の写真を持ってきた。なんだか子供が子供を描いたような絵だが、若い女の子にも人気のある、随分と有名な画家らしい。難しくて訳のわからない絵を想像していたのだが、これなら小学校の近くの古びた文房具屋に飾ってあっても、そんなに偉そうな感じはしない。

——へえ、こういうのも現代アートっていうのか。子供が描いたような絵なのに。でも悪くないな。私も美術部に真面目に出ていたら、もしかして美大に行つて、トリエンナーレのために、ここで絵を飾つてたりして。

いつしか、自分が芸術家になれたかもしれないなどと、大胆な想像までしていた。まさ子は、特に絵が得意というわけではなかったが、高校では美術部に属していた。運動は苦手だったし、中学のとき入っていた珠算部は高校には無かった。かといって他の文化部も決め手が無く、真面目に参加しなくても許される自由な部だと聞いて、同じ中学出身の同級生と一緒に入部したのが美術部だった。その同級生は、兄弟の多い家計を助けるために学校帰りにアルバイトをしていた。高校生になったまさ子にも、大人の一員になったという自負があ

り、学校が引けたら夕食の準備に忙しい母親と店番を交替して、少しでも役に立ちたかった。それに店にいると、小中学校で仲良しだった同級生やその友だちが、まさ子が店にいる夕方の時間を見計らって買い物ついでに集まり、高校はどうだとか、あの子は今どうしてるだとか、しょっちゅう店先で話に花を咲かせていて、まるで「おしゃべり部」という部活のようだった。なので、本当の部活の方は、美術の授業の課題を仕上げるだけの時間に過ぎなかった。

美術部には、まさ子の町の美大に入りたくて何浪もしている卒業生が何人もいると聞いて、とても美大なんか目指す気にはなれなかった。短大を出て、次男が三男のサラリーマンと結婚して、できれば養子に入ってもらって、まさ子は子育てをしながら店番をする。高校生の頃は、我ながらつまらない将来像だと思っていたが、そういう普通に見える人生こそが、思うようには手に入らないものだ、今のまさ子は知っている。

思えば、部活動も職業も、縁談も商売も、まさ子は何かを選択するのがいつも苦手だったのだ。「おしゃべり部」の同級生は、みな町外へ嫁いでしまつて滅多に集まることもなく、選び取る決断ができなかつたまさ子は、変わらず同じ場所にいる。

「作家さんが大学生の頃、こちらの文具店さんに買い物に来る度に、いつも高校生の女の子がひとりで店番をしていて、それがすごく生き生きしてて、えっと、その子が今のご店主さんなんでしょうか？ その姿が、今でも忘れられないこの商店街の思い出だから、こちらの店がまだあるって知ってすごく喜んで、展示するならどうしてもここがいいって言うんです」。

なんでも、その画家は東北出身だが、この町のくだんの美大卒で、学生時代にまさ子の店へ買い物に来ていたらしい。当時は客も多く、美大の他にも大学生がよく立ち寄っていたので、たまに世間話には応じて、顔や名前まではよく覚えていない。

「トリエンナーレの設置の際には、作家さんもこちらに来るそうです」。

——その芸術家の先生は、まさか四十年近くも前と変わらず、私が店に立ってるなんて思っていないだろうなあ。体重はそんなに増えてないけど顔はやつ

ぱりおばさんだし、わかるかしら。いや、わからない方がいいのか。

若き日の自分が、今の自分の生活に、何か新しい出来事を運んでくるなんて、期待したこともなかった。「青春時代」などという、テレビドラマの若者たちが使うような言葉の響きが似合う思い出は、まさ子の十代には見当たらなかった気がする。

—— 現代美術に合わせて、この店もちょっとは現代っぽくした方がいいのかな。薄暗い蛍光灯だけでも変えてみようかしら、顔色が悪く見えるし。でも、この蛍光灯って昔もこんなに暗かったんだろうか。その時代には、そうは感じなかったんだね、きつと。

まさ子は古く色あせた内装を眺めながら、店に立っていた自分の姿が、どんな風にその芸術家の目に映っていたのだろうかと思いつかべてみた。

—— 他の人には、私も「青春」の中にいる人に見えてたのかな。

懐かしいキャラクターがプリントされたお気に入りのトレーナーを着て、髪を流行りのポニーテールにした十代の少女が、陽の光を自らの輝きで弾くようにして目の前に立っていた。